

## 三重県内開催スポーツ大会へのメディカルサポートの取り組み

ユマニテク医療福祉大学校 理学療法学科  
島田隆明

鈴鹿回生病院 リハビリテーション課  
佐久間雅久

伊勢慶友病院 リハビリテーション部  
松本光司

三重大学医学部附属病院 リハビリテーション科  
直江祐樹

三重県立志摩病院 リハビリテーション科  
丸山勝也

### 【はじめに】

15 年程前より医療有資格者の有志により「三重県スポーツリハビリテーション研究会」を立ち上げ、三重県内で開催されるスポーツ大会のメディカルサポートを行っている。そこで、本研究会の理念および取り組みについて報告する。

### 【三重県スポーツリハビリテーション研究会について】

三重県スポーツリハビリテーション研究会（以下：スポリハ）では、理念と目的（表1）をもって研究会を発足し、現在では約 60 名の会員数で、医療有資格者でありほとんどが理学療法士の資格を有する。また、事務局、サポート部、学術部、渉外部に組織を編成し、サポート部では各競技団体の開催するメディカルサポートへの人員配置、学術部ではメディカルスタッフの育成のための講習会、選手の身体能力測定やアンケート調査、渉外部では他競技団体との渉外を行い、スポリハを運営している。

理念	<ul style="list-style-type: none"><li>● スポーツ活動に対する予防対策，傷害対策を積極的におこなう。</li><li>● すべてのスポーツ活動に対して貢献をする。</li></ul>
目的	<ul style="list-style-type: none"><li>● スポーツ競技大会のメディカルサポート活動を実施し，選手の傷害対応や傷害予防を行う。</li><li>● メディカルサポート活動を行うスタッフは，サポートスタッフであり，サポートスタッフの育成を積極的に行う。</li><li>● スポーツ活動を行う指導者，選手の競技力向上をサポートする。</li><li>● スポーツ活動における学術的活動を実施する。</li><li>● アスレチックトレーナーの育成を行う。</li></ul>

表 1: 理念と目的

## 【研究会活動】

### 1. サポート部の活動

競技大会メディカルサポートでは、2010年の日本スポーツマスターズ三重大会、2012年の名張ひなち湖紅葉マラソン大会、2013年の名張青蓮寺湖駅伝競走大会、菰野町ヒルクライムチャレンジ in 鈴鹿ラインの大会サポート行い、競技別大会メディカルサポートは、三重県高校野球連盟大会、高体連バスケットボール大会、バレーボール大会、三重県水泳連盟競技大会のサポート行っている。日本スポーツマスターズ2010三重大会では、大会参加者7700名を対象としてメディカルブースの設置を行った。来室者は約700名であり、テーピング40%、ストレッチ30%、コンディショニング30%を行った。また、来室した選手のコメントからは、各会場へのブースの設置の必要性やスポーツ傷害への対処法が理解できたなどのコメントがあった。またレクレーション志向の強い名張ひなち湖紅葉マラソン大会では、大会参加者は700名に対してメディカルブース来室者は約30名であり、ストレッチ47%、テーピング21%、コンディショニング・健康相談32%であった。普段からの練習時間が短い期間でしか取れなかったためにテーピングやストレッチなどの施術が多かったことが考えられた。しかし、競技大会時にはメディカルブースの設置を行うことが、参加選手の身体への自己管理の啓発につながっており、運営者側、選手、スタッフともども共通理解ができたと感じられた。

### 2. 学術部の活動

U15 サッカートレセン身体能力測定、三重県高校野球連盟アンケート調査（南勢地区）メディカルスタッフ育成講座（テーピング、ストレッチ、救急処置講習会、症例検討会）を行っている。高校野球連盟アンケート調査は、三重県南勢地区の野球選手300名を対象とし傷害の有無、怪我時の受診施設などの調査を行った。過去の疼痛の有無に関して、90%の選手が疼痛を経験しており、現在の怪我は、15%の選手が何らかの傷害を有しており、疼痛に関しても50%の選手が疼痛を有したまま練習を行っていた。また、疼痛に関して指導者に報告していない選手が70%おり、疼痛を有している選手のほとんどが接骨院や鍼灸院に通

院しているのが現状であった。アンケート調査から選手の50%は何らかの痛みを有しながら競技を行っている可能性があり、そのために傷害を悪化させる可能性がある。また、傷害に対して適切な処置が行われていない可能性もあることを理解する必要がある。

## 【結語】

野球選手に関するアンケートから傷害や疼痛に関する理解や対処方法が十分でないために傷害を悪化する可能性があることが示された。また、競技大会からのアンケートからも傷害に対する対処方法が理解されておらず、自己判断で処置が行われている様子が伺える。そのため、選手・指導者に対して積極的な傷害予防や対処法対策の啓発活動を行って行きたいと考える。そのためには、競技大会へのメディカルトレーナーブースの常設化ならびに選手自身が傷害に対して自己管理できるように若年者からの身体管理の指導などを行っていく必要があると考えられる。

## 【文献】

- 1) 三重大会実行委員会監修：日本スポーツマスターズ2010三重大会報告書、2010
- 2) 松本光司ほか：三重県硬式野球部選手の実態調査．第28回東海北陸理学療法学会誌，107.2012